第七章　巴里留學當時ノ思出

「ポーランド」青年ト明石大佐

以上ハ筆者カ外務省ニ奉職シテカラ日露戰爭ニ至ル迄ノ交渉略史タカ、思ハス之レヲ長ク書キ過キタノハ曩ニ述ヘタ如ク、筆者カ外交官ヲ志望スルニ至ツタ動機カ、露國ノ極東侵出ニ刺戟サレタ爲テ、東大卒業後間モ無ク對露問題ノ研究談話會（宣揚會ト呼ンテ居タ）ニ仲間入リシテ近衞霞堂公等ト屢々意見ヲ戰ハシタカラ、自然其當時ノ記憶カ未タニ腦裏ニ滲ミ込ンテ居テ、最早誰テモ知ツテ居ルカラ蛇足タト氣カ付イタ事迄モ、不識々々筆カ走ツテシマツタノタ。扨テ前ニ書イタ通リ筆者ノ巴里赴任ハ留學ノ意味タツタカラ、間モ無ク政治學校ニ入學シタ、此學校ニハ各國ノ學生カ多數居タカ、極東テ日露ノ交渉カ紛糾シテ居ル當時ノ事故、自然筆者ノ求メル友モ亦筆者ニ近ツク學生モ「ポーランド」人カ多カツタノハ當然テ、而カモ「ポーランド」ノ貴族又ハ富豪ノ子弟ハ露國ノ治下ニ餘リ多クノ反感ヲ持ツテ居ラヌ樣ニ見受ケラレ、從ツテ話モ合ハヌカラ、筆者ニ近ツクモノハ「ポーランド」ノ貧書生カ多カツタノテアル。彼等ハ「カルチエー、ラタン」書生町ノ穢ナイ家屋ノ地下室ニ集合シテ盛ンニ慷慨シ、悲憤ノ極流涕スルコトモ屢テアツタカ、筆者ノ記憶ニ最モ深ク殘ツテ居ルノハ、明治三十六年ノ暮寒イ冬ノ夜彼等ト共ニ其地下室テ少シノ薪テ暖ヲ取リツツ、時事ヲ談シタ時ノ光景テアル。其後日露ノ關係ハ益々惡化シ遂ニ戰端カ開カレルニ至ツタカ、明治三十

七年二月八日ノ夜半帝國海軍カ旅順口テ露艦ヲ襲擊沈沒サセタ報道ハ、當時無線電信ノ發達セヌ時代故、日本カラノ情報ニ先ンシ陸續キノ露國カラ巴里ニ傳ヘラレタ。筆者ハ九日モ例ニ依リ政治學校ニ行ツテ居タカ、晝刊新聞ニ右ノ記事カ出タト大喜ヒテ、午前十時頃其新聞ヲ筆者ニ見セニ持ツテ來タノハ夫ノ「ポーランド」人中ノ二名テ在ツタ。彼等ハ其翌日筆者ニ向ヒ、今度ノ戰爭テ「ポーランド」人ハ多大ノ同情ヲ日本ニ寄セテ居ル。就テハ出來ル丈ケノ事ヲシテ之レヲ實際ニ示シタイト思ヒ本野公使ニ手紙ヲ書クコトニシタカラ、筆者カラモ宜シク取次イテ呉レト依賴シタ。此手紙ハ公使ノ手許ニ十一日ニ屆キ、趣旨ハ「ポーランド」人ノ義勇兵ヲ募リ、日本ニ味方シテ露國ヲ擊タウト云フニ在ル。公使トシテハ輕々シク深入スルコトモ出來ヌノテ、筆者カラ公使ノ傳言トシテ其同情ノ厚キヲ謝スルト同時ニ、來意ノ實行ニハ未タ時カ早イ樣ニ思フト告ケタカ、彼等ハ更ニ公使ニ面會シテ連リニ「ポーランド」人カ日本ニ助力シタイ希望ヲ述ヘ、其一策トシテ極東ニ在ル露兵中ニハ「ポーラント」人カ多イノヲ幸ヒ、之レヲ脫走サセル爲ニ宣傳文ヲ軍中ニ撒布スルカラ、脫走者ハ日本テ保護スルト云フ保障ヲ政府カラ呉レヌカ、ト申入レタ。公使ハ相當ノ興味ヲ以テ之レヲ聞キ、筆者モ若シ實行ノ可能性カアルナラ面白イ試ミタト思ツタ。此頃公使館ノ周圍ニハ保護ノ美名ニ隱レテ、佛國ノ警官ヤ密偵カ絕エス見張ツテ居ルカラ、其後彼等トノ會見ハ筆者カ引受ケ、筆者ノ「アパート」テスルコトニシタ。此兩名カ後日明石大佐活動ノ樞機ニ參畫シタ最初ノ「ポーランド」人テ、筆者カ紹介者トナルノ誇リヲ持チ得タノハ、誠ニ不思議ノ因緣テアル。

日露戰爭ノ初期ニ於ケル佛國人ノ對日態度

日露兩國ノ間ニ戰端ヲ開カレタノテ、筆者ハ未タ在學中テハアツタカ、傍ラ手不足ノ公使館事務ヲ補助シタイト本野公使ニ申入レ、即日執務スルコトトナツタ。佛國ハ露國ト同盟ノ關係ニ在ルノミナラス、佛國人誰シモ日本カ尨大ナ露國ノ敵テ無イト思ヒ込ンテ居タカラ、事毎ニ帝國ノ行動ヲ誹謗シケチヲ付ケル、無論露國側ノ宣傳ハ非常ニ上手テ、又滿洲カラノ情報ハ當時ノ通信機能ノ關係上日本カラヨリモ露國カラノ方カ早イノテ、露國ハ其行ツタ戰時法違反ノ行爲ヲ巧ミニ改竄潤色シテ日本ヲ非難シ、佛國ノ諸新聞ハ悉ク其提燈ヲ持ツノタカラ、當時佛國ニ居タ帝國臣民ハ非常ニ氣不味イ思ヒヲ熟ツク體驗シタカ、筆者ハ國際法研究者タルノ故ヲ以テ、帝國陸海軍ノ行動ノ正當ナルコトヤ、訛傳サレタ事件ノ眞相等ヲ、佛國ノ公衆ニ釋明シ了解サセル爲ニ、執筆スルノ任務ヲ命セラレタ。

旅順口襲擊ニ對スル釋明

右ノ論說中帝國海軍カ旅順口ノ露艦ヲ强襲シタ行動ニ對スル非難ノ不當ナコトヲ辯駁シタ一文ハ、相當ニ佛國與論ノ共鳴ヲ博シ得タ樣考ヘルカラ、之レヲ要譯シテ左ニ揭ケル。

開戰ノ宣言ナシニ戰爭ヲ開始シ得ルヤ否ヤノ議論目下喧シキ所、筆者カ本論ヲ起稿セル所以ハ、學究的ニ之レカ可否ヲ論斷スルニアラスシテ、專ラ日本行動ノ眞相ヲ闡明セントスル爲テアル。

露國ハ交涉ノ全期間ヲ通シ、日本ノ提議ヲ妥協的精神ヲ以テ接受スルヲ常ニ執拗ニ拒否シ、一方日本ノ提議ニ對スル回答ヲ無限ニ遲延スルト同時ニ、他方其陸海軍ノ準備ヲ鋭意進捗スルヲ怠ラナカツタ、左ニ揭ケル事實ハ之レヲ證明シテ餘リアルト思フ。

一、露國ハ滿洲撤兵ノ誓約ヲ勵行セス、撤兵期限タル一九〇三年四月以來、大規模ノ戰備ヲ極東ニ整エタ。

二、露國ハ亦同月以來其東亞海軍力ヲ次ノ如ク增加シタ。

	隻	噸
戰鬪艦	三	三八、四八八
巡洋戰艦	一	七、七二六
巡洋艦	五	二六、四一七
驅逐艦	七	二、四五〇
砲艦	一	一、三三四
雜務艦	二	六、〇〇〇
計	一九	八二、四一五

露國ハ右ノ外驅逐艦ノ器材ヲ鐵道ニ依ツテ輸送シ、旅順口テ同艦七隻ヲ組立テタカ、更ニ義勇艦隊所屬ノ二船ヲ浦鹽テ武裝シ、之レヲ軍艦ニ變更シタ。加之露國ハ一戰鬪艦、三巡洋艦、七驅逐艦及四水

雷艇（其合計噸數三〇、七四〇）ニ廻航ヲ命シ、事情カ若シ其召還ヲ餘儀ナクシナカツタナラ、是等ノ軍艦ハ露國ノ太平洋艦隊ニ編入サレタコト勿論テ、此場合右艦隊カ去年四月以降增加シタ總噸數ハ實ニ十三萬三千噸ヲ超エル勘定トナル。

三、一九〇三年六月二十九日以來露國ハ其陸軍力ヲ非常ニ增加シタ、此日西比利亞鐵道ノ運輸能力ヲ試驗スルト云フ口實テ、歩兵二旅團、砲兵二大隊、騎兵一團及軍隊用一列車ヲ送遣シタカ、其後斷エス軍隊ヲ極東ニ增派シ、本年二月初ニ於ケル增加兵力ノ總數ハ四萬人ヲ超ヘタカ、露國ハ更ニ二十萬人以上ヲ追加輸送スル計畫ヲ持ツテ居タ確證カアル。

四、露國ハ旅順及浦鹽ノ要塞ヲ修築增補シ、奉天遼陽其他多數ノ軍事上要地ニ要塞ヲ築造スル爲、日夜工事ヲ急クト同時ニ、鐵道及義勇艦隊ヲシテ斷エス武器彈藥ヲ極東ニ送ラセ、昨年十月ニハ野戰病院ノ材料ヲ滿載スル十四輛ノ貨車カラ成ル一列車ヲ急遽極東ニ派遣シタ。

以上ノ事實ハ露國ハ毫モ平和的協調ノ意思ヲ有セス、優勢ノ兵力ヲ擁シテ日本ヲ壓服セント計畫シツツアルコトヲ明カニ證據立テルモノテ、露國ノ軍事的活動ハ本年一月ノ終カラ二月ノ初メニ亘ツテ、更ニ一層ノ甚クシキヲ加ヘタ。

一月二十一日歩兵約二大隊及騎兵一枝隊ハ旅順大連カラ朝鮮北境ニ派遣セラレ、二十八日「アレキシエフ」總督ハ鴨綠江方面ノ軍隊ニ對シ、何時テモ戰鬪シ得ル樣準備ヲ命シタ。二月一日浦鹽ノ司令官ハ、同地ニ何時戒嚴令カ施行サレルカ分ラヌカラ、同地居留ノ日本人ヲ本國ニ歸還サセルカ、又ハ「ハバロフスク」ニ引揚ケサセル樣中央政府ノ命ニ依リ、同地駐在ノ我貿易事務官ニ通達シタカ、之レト前後シテ旅順口ニ繫泊中ノ諸軍艦ハ修理中ノ一戰艦ヲ除キ悉ク何レカニ發航シ、陸兵ハ遼陽ヨリ鴨綠江ニ南下シタ。

是等ノ行動ハ露國カ自稱スル平和的意圖ト全然背馳シテ居テ、機ノ熟シタ時ニ如何ナ態度ニ出ルカト云フコトヲ立派ニ證明スルモノタカ、之レニモ拘ラス日本政府カ常ニ外交的解決ニ向ツテ專心シ、異常ノ忍耐ヲ保持スルノヲ忘レナカツタ、然シ何事ニモ際限カアル、殊ニ日本ノ感情ハ之レヲ無限ニ抑壓シ得ルモノテナイ、露國軍備ノ絕エサル增加ニ脅カサレル日本國民ハ、危惧ノ念ヲ日ト共ニ加エ、曾テ露國カ黑龍江烏蘇里地方ヲ征服シタ歷史ヲ追懷シ、旅順口ニ占據スル露國カ、滿洲テ又「ムラヴィエフ」ノ政策ヲ再演シハセヌカ、其結果朝鮮モ亦彼ノ手中ニ陷ルノテハナイカ、トノ憂慮ヲ增大シ行クハ誠ニ無理カラヌコトテ、日本政府カ如何ニ衷心カラ外交的平和手段テ案件ヲ解決セント希フモ、國民輿論ノ聲ニ耳ヲ假サヌ譯ニハ行カヌ、政府ハ遂ニ決心シテ、何時迄待ツテモ一向ニ埒ノアカヌ商議ヲ打切リ、栗野公使ニ引擧ケヲ命シタノテアル。

斯クノ如ク一目瞭然タル露國ノ計畫的談判引キ延ハシ策ト、出來得ル限リノ手段ヲ盡クシテ平和的ニ懸案ノ解決ヲ謀ラント試ミタ日本ノ忍耐トヲ對比スルナラ、公平ノ見地ニ立ツテ事件ヲ判斷スル者ハ悉ク日本ノ妥協精神ヲ認識スヘキテアル、日本カ若シ此上談判ヲ繼續シタラ準備ノ整フタ時露國カ必ス自分カラ之レヲ破裂サセタタロウコトハ、火ヲ見ルヨリモ尙ホ明白ナ事態タカラ、便々トシテ此ノ時機ノ到來ヲ待ツ

コトハ日本トシテ到底不可能テアル。

右ノ樣ナ事情ノ下ニ國交ハ斷タレタノタカラ、日本ノ眼カラ見レハ此斷交ハ單ニ及ヲ擬シテ是迄拒絶シテ居タ事項ノ承諾ヲ露國ニ求メントスルカ如キ虛勢テハナイ、此樣ナ虛勢ハ露國ニ於テコソ常套手段カモ知レヌカ、日本カ其眞似ヲシテモ露國ヲ聽從サセル望ミノナイノヲ知ッテ居ルカラ、此斷交コソ日本ノ決心ノ憑證テ、國ヲ擧ケテノ鬪爭ヲ意味スルニ外ナラヌノテアル。故ニ政府カ長ク引摺ラレタ談判ヲ打切ラントスルノ報道ニ接シタ時、日本ノ諸新聞ハ擧テ政府ノ決斷ヲ賞揚シ、陸海軍ニ向ッテ其ノ期待ト將來ノ慶福ヲ祈ル衷情ヲ披瀝シタノテアル、此間內閣ハ形勢ノ重大ナコトト、時日ノ經過カ事局ニ及ホス影響ノ極メテ大ナルコトトヲ自覺シ、無爲ニ過コスノ危險ヲ痛感シテ、二月四日御前會議ヲ開キ、談判ノ打切リト日露國交ノ斷絶トヲ決定スルト同時ニ、右ノ結果執ラネハナラヌ手段ヲモ講究シタノテアル。

此御前會議ハ次テ起ルヘキ運命如何ニ拘ラス日本ノ歷史上重要日附ヲ構成スル記念スヘキ閣議テアッタカ、二月六日日本國皇帝ハ詔勅ヲ陸海軍大臣ニ賜ハリ、極東ノ平和ヲ維持セント期スル其眞摯ナル希望ニ拘ラス、故意ニ時局ノ解決ヲ遷延スル露國トノ交涉ヲ打切ルノ已ム得サルニ至リタルニ付テハ、帝國ノ名譽ト光輝ヲ維持發揚スルハ一ニ懸ッテ陸海軍將卒ノ忠節ト勇武トニ在ルコトヲ宣示サレタ。

二月五日夕刻動員令下リ、又佐世保碇泊ノ艦隊ハ速カニ露艦ヲ搜索スル爲出港命令ヲ受取ッタ、斯クシテ東鄕中將ノ指揮スル日本艦隊ハ六日午後二時佐世保ヲ發航シテ勃海灣ニ向ヒ、途中其一部ハ運送陸兵保護ノ爲仁川ニ派遣サレタ。

日本政府ハ二月五日栗野公使ニ電訓シ、同公使ハ翌六日午後四時露國政府ニ之レヲ交付シタカ、在東京「ローゼン」公使ハ二月八日斷交ノ通告ヲ受取ッタ、斯クノ如キ事態ノ下ニ於ケル國交斷絶カ何ヲ意味スルカハ頗ル明白テ疑義ヲ容ルル餘地ハ無イ、若シ露國カ之レヲ目シテ單ナル斷交ト考ヘタトスレハ、此推斷ハ自ラヲ欺クモノニ非サレハ、日本ヲ愚弄シ其國情ヲ無視スルモノト云ハネハナラヌ。

二月二十日發行ノ露國官報ハ公然日本ノ行動ヲ非議シテ左ノ如ク論シタ。

外交關係ノ破裂ハ決シテ戰爭ノ開始ヲ意味スルモノテ無イノニ拘ラス、日本ハ二月八日カラ九日ノ夜露國ノ軍艦ト商戰トニ對シテ謀反的攻擊ヲ行ヒ、國際法ノ條規ニ背反スル行動ヲ敢テシタ、宣戰ニ關スル日本國皇帝ノ詔勅ハ漸ク二月十一日ニ至ッテ發布サレタノテアル。

此非議ノ他ノ部分ニ付テ回答スルハ容易ナレトモ暫ク置キ、「國際法ノ條規ニ背反スル行動ヲ敢テシタ」トノ一節ニ付テハ、「默レ」トノ一言ヲ以テ應對スレハ足リルト思フ。

露國カ高唱スル國際法ニ關スル書籍ヲ繙ケ、如何ナル國際法ノ著述テモ開ケ、吾人ハ其中ニ何ヲ發見スルタロウカ、發見スルモノハ戰鬪開始前宣戰ノ必要アリヤ否ヤトノ論爭ノミテアロウ、或學者ハ之レヲ要スト主張シ。他ノ學者ハ否ラスト說ク、而シテ之レヲ要ストスル者ト雖モ事實上多數ノ戰爭カ宣戰ナシニ開始サレタ事實ヲ無視スルコトカ出來ヌノヲ奈何セン、今統計ヲ揭ケテ之レヲ示セハ「モーリース」氏ノ計算ニ依ルニ一七〇〇年カラ一八七一年迄ノ間ニ宣戰ナシテ開始サレタ戰爭ハ實ニ百七回ノ多キニ及ンテ居ル、其內ニハ一七一九年ノ佛西戰爭、一七九二年ノ佛對歐洲戰爭ヲモ擧ケルコトカ出來ル、先ッ宣戰シタ

ノハ英佛戰爭、一八七〇年ノ獨佛戰爭等テ、其數ハ極メテ僅少テアル。

古人ハ戰爭ニ先チ宣戰スルノニ躊躇シナカツタカ、今人ハ全ク別ノ考ヘヲ持ツテ居ル、歐洲大陸殊ニ佛國國際法學者ノ多數ハ先ツ宣戰スルノヲ希望スヘキモノタト說イテ居ルカ、英國派ノ學者ハ之レヲ不必要タト主張シテ居ル、前者ノ論據ハ煎シ詰メレハ單ニ便宜ヲ基礎トスルニ過キヌノテ、此以外ニ何等有力ナ理由ヲ發見スルコトハ出來ヌ、其所謂便宜トハ不意ニ敵ヲ攻擊セシメス、未タ開戰ヲ知ラヌ第三國ノ利益ヲ害セサラシメントスルニ外ナラヌノテアルカ、此二ツノ論據ハ通信網ト共ニ其重要性ヲ失セ、殊ニ現戰爭ニ付テハ此論據ハ全然無價値テアル、何トナレハ兩交戰國ハ到來スヘキ結果ヲ慮カリ客夏以來其準備ヲシテ居タシ、又斷交ニ關スル日本ノ通告ハ全世界ノ識者ノ目カラ見レハ其結果ニ疑議ヲ挿ム餘地カナイカラテアル。

「ピンエロ、フォレイラ」ハ宣戰ヲ常ニ必要ナリト主張シタ「ヴアッテル」ノ說ヲ左ノ如ク反駁シテ居ル。

此說ハ武力ニ依ルヨリ外ノ方法テハ我カ理ノアル所ヲ貫徹スルコトノ出來ヌ樣ニ敵カラ仕向ケラレナカラ、其敵ニ豫告シテ不正ノ遂行ヲ充分用意スルノ時間ヲ彼ニ與ヘヨト云フニ外ナラヌノテ、好人物ノ極ヲ我ニ强ユルモノテアル、宣戰ハ義務テナイノミナラス、之レヲ爲スノハ不用意至極テアル。

然シナカラ或記事ニ依リ既ニ先入主トナツタ公衆ニ對シテ、遲レ馳セノ取消又ハ訂正カ殆ント何等ノ效果ノナイノハ說明スル迄モナイ事テ、殊ニ初メカラ片鱗屑ノ目テ偏頗ナ心境ニ立ツテ居ル當時ノ佛國人ニ、我々ノ努力カ甚輕微ナ反影シカ與エ得ナカツタノハ已ヲ得ヌ事テハアルカ、同時ニ又頗ル心外タツタ。

在巴里露國警察ノ活動

加之露國ハ同盟國タル佛國ノ首都巴里ニ其警察組織ヲ持ツテ居タ、之レハ反政府運動ノ看視其他カ主タル目的タツタノテアルカ、其活動圈ハ無論之レニ限ラレタ譯テハ無ク、日露開戰ト共ニ其魔手カ愈々延ヒ、其上ニ佛國ノ警察カ之レト密接ノ聯繫ヲ取ツテ居ルノタカラ頗ル始末ニ惡イ、筆者ノ私宅殊ニ海軍武官ノ住宅等テハ主人ノ外出後雇人ヲ脅迫シテ紙屑等ヲ持去ル事カ頻繁タツタカ、筆者カ公使館ノ紙屑籠ニ破棄シテ置イタ原稿迄モ巴里警視廳ニ補綴キ合ハセテ保存サレテ居タノヲ見タ者カ在ル、幸ニ此原稿ハ新聞社宛ノモノテ何等ノ重要性カ無カツタ故、取ラレテモ無害テハアツタカ、露國密偵ノ活動ト其金權ノ結果ハ終ニ我機密通信ノ基本タル電信符號ノ漏洩事件ヲ惹起スルニ至ツタ、此事ハ我國トシテ頗ル不面目ノ事故、闇カラ闇ニ葬リ去リ度ク考ヘテ居タカ、小松綠氏ノ外交秘話ト題スル隨筆中テ既ニ世ニ公ケニサレタカラ、寧ロ其眞相ヲ紹介シ、重ネテ斯クノ如キ醜態ノ繰返サレヌ樣心掛ケ度イ意味テ、此所ニ記述スルニ決シタノテアル。

電信符號ノ漏洩

家屋稅仲裁裁判事件テ筆者カ和蘭國海牙ニ出張シタ時、同地帝國公使館ノ金庫カ甚タ不完全ナノヲ見テ、筆者ハ同僚ニ電信符號カ此金庫ニ入レテ在ルノカト聞イタラ、公使カ自分テ保管シテ居ルトノ答エタツタ、時ノ公使ハ筆者入省當時電信課長ヲシテ居タ人タカラ、何人ヨリモ良ク電信符號ノ重要性ヲ知ツテ居ルヘキ

筈テ、筆者ノ如キ無經驗者カ其保管方法ニ彼レ此レ喙ヲ容ルル譯ノモノテ無イ事ハ自分テモ能ク了解スルカ、之レカ虫ノ知ラセトテモ云フノタラウカ、或ハ又日露交渉ノ終期ニ我電信カ露國テ解讀サレタトノ情報カ在ツタ爲、電信符號ノ事カ氣ニ掛ツテ居タカラカモ知レヌカ、筆者ハ何ト云フ事ナシニ不安心ノ樣ナ氣カシテ堪エラレヌノテ、不遜テアルノハ萬々承知シナカラ、同公使ニ其保管方法ヲ尋ネタラ、筆者ノ待チ設ケテ居タ樣ニ不機嫌ノ顏色テ、二重鍵ノ抽斗ニ入レテ在ルカラ心配ニ及ハヌトノ答タ、然シ未タ不安カ去ラヌノテ其抽斗トハ何レテスカト反問シタラ、極メテ簡單ナ机ノ抽斗テ、其抽斗ノ鍵ヲ更ニ他ノ書類箱ニ入レ、此書類箱ノ鍵ヲ自分テ持ツテ居ルノカ所謂二重鍵タト云フコトヲ知ツテ、開イタ口モ塞カラヌ位タツタカ、何シロ机ノ鍵其モノカ非常ニ簡單ナノテ、之レヲ開コウト思ヘハ鍵ノ所在ヲ知ル必要モ無イ位ナノタカラ、差シ出カマシイノハ承知ノ上テ筆者ノ氣附ヲ述ヘテ引取ツタカ、巴里ニ歸ツテ間モ無ク筆者ノ杞憂ハ現實トナツテ、我電信符號ノ寫眞版ヲ在佛公使館ニ賣リニ來タ者カ在ツタ、我々ハ何ヲ措テモ電信符號漏洩ノ事實ヲ東京ニ知ラセルノヲ急務ト信シ、外務省ニ電報シタラ折返シテ何地テ取ラレタモノカ心當リカアラハ追電セヨト云フテ來タ、筆者ハ直覺的ニ海牙タト感シタカ、取調ノ末果シテ同公使館ノ僕長カ露探ニ買收サレテ、夫ノ机ノ抽斗カラ一週間餘ニ亘リ毎夜取出シテ寫眞ニ撮シタ事實カ擧ツタ、而カモ筆者カ同地テ公使ニ注意シタ當時此犯罪カ行ハレツツ在ツタノハ如何ニモ皮肉タカ、露國ノ手先キト成ツタ者カ貪慾飽ヲ知ラナカツタ爲、漏洩ノ事實カ我方ニ知レ、新符號ヲ「ボーツマス」談判ノ際ニ用ユルコトノ出來タノハ、不幸中ノ幸タツタ、然シ如何ニ複雜ナ電信符號テモ人間ノ作ツタモノハ、他ノ人カ之レヲ解讀シ得ヌト云フ道理カ

無イカラ、假令符號其モノヲ盗マレナクトモ、同シ符號ヲ長ク使用スルノハ常ニ頗ル危險テアル、近來獨逸テ立派ナ機械カ出來タト聞イタカ、之レハ秘密電信ニ對スル福音タト思フ。